

### 10月第3週の礼拝説教

■日 時：2022年10月16日（日）10：30—11：30 聖霊降臨節 第20主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「お言葉どおり」

■聖 書：ルカによる福音書1章26—38節（新約p100）

■讃美歌：205「今日は光が 造られた日よ、」525「やすかれ、わがこころよ、」

先週の10月14日（金）の朝、母教会の友人から、大木英夫先生が10月12日（水）に亡くなられた、というメールが入りました。私は、52年前の初夏に下宿の近くにあった日本基督教団の滝野川教会に通い始めました。そして、主日礼拝と聖書研究・祈祷会はほとんど欠席することがありませんでした。そこで語られる大木英夫牧師の説教と聖書の学びに出会うことによって、今の私があるといっても過言ではありません。大木先生は東京神学大学の教授でもあられましたから、夫も先生の講義を受けました。私たちの結婚式のときに証人になってくださり介添えをして下さったということもあり、夫は、本日は滝野川教会の礼拝に出席しています。果たして、先生の教えにどれだけ沿った歩みができているかと自問自答しながら、「これで一つの時代が終わった」というのが、今の私の心境です。

さて、9月4日の主日礼拝から使徒信条についてお話してきて、本日は7回目になります。すでにお話してきましたが、使徒信条はその内容によって三つに分けられるとされています。第一部は「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。**」という部分で、父なる神と私たちの創造について告白しています。第二部は「**我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。**」から始まり、子なる神と私たちの贖いについて告白しています。第三部は「**我は聖霊を信ず、**」から始まり、聖霊なる神と私たちの聖化について告白しています。本日は第二部の始まりである「**我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。**」に続く「**主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生れ、**」という文言について、ルカによる福音書1章26節から38節に聴きながら一緒に考えてまいりましょう。

使徒信条は主イエスに対して「神の御子」「われらの主キリスト」と、主イエスが「まことの神」であられることを告白した後、その神の子主イエスがマリアを母として聖霊によって受胎し「まことの人」として誕生されたことを告白します。この奇跡は「キリストの処女降誕」あるいは「受肉」と呼ばれています。しかし、この二つのことは、初めて聖書

を読んだり、キリスト教に触れたりする多くの人々の大きな躓きとなっています。私自身が洗礼を受けて間もないころ、親しかった友人を教会に誘ったときに、「キリスト教にはどうしても納得できない二つのことがある。それは『キリストの処女降誕』ということと『死者からの復活』である。そのことについて、あなたがどのように考えているのかを私によくわかるように説明してくれたなら、一緒に教会に行ってみる」と言われました。友人なりにキリスト教についてよく学んでいたのだと思います。だからこそ、私がきちんと説明できずに黙ってしまったことに対して、二の足を踏んでしまったのだと思います。そして今、同じように誰かに問われることがあったら、私は自信をもって答えられるだろうかと思いました。しかし、答えることが非常に難しい事柄であるからこそ、今の私ならば、「一緒に教会で礼拝しましょう。そこで必ずあなたに合った答えが示されますよ」と確信して誘えると思います。

さて本日の聖書箇所は、一般には、クリスマスの近くのアドベントの時期に読まれます。本日は、その状況を丁寧に描く前半ではなく、28節の「**天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」**」にまず注目したいと思います。「おめでとう」と訳されている言葉は、もともとの意味は「喜びなさい」です。それは当時挨拶の言葉として用いられていたもので、その場面に応じていろいろに訳すことができます。ここでは、「あなたは恵まれた方である。主があなたと共におられる」という宣言と結びついていますから、「おめでとう」とするのが相応しいわけです。しかし、天使から突然「おめでとう」などと言われても、29節に「**マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ**」。とあるように、マリアは戸惑うばかりです。この「戸惑い」は前の口語訳聖書では「ひどく胸騒ぎがして」となっていました。マリアは、何のことかしらと戸惑っただけではなくて、不安と恐れを感じたのです。それは30節にあるように、神様の方から「**恐れることはない**」と告げて下さらなければ、その語られる御言葉さえ聞くことはできないほどの深いものでした。このようにして天使はマリアに、聖霊によって働く神様の力が彼女を包むことを告げ、その神様の力は、すでに1章5節から25節に記されているように、子がなくて年を取っていたエリサベトに子供を与えるほどに大きいことを示しました。その締めくくりとして語られたのが37節の「**神にできないことは何一つない**」という言葉です。このことは、使徒信条の文言で考えるならば、神は「**全能**」であるということです。ところで私たちは、「**神にできないことは何一つない**」という言葉、「神は全能であるがゆえに、まだ結婚生活に入っていない処女であるマリアが、いいなずけヨセフによってではなく聖霊の働きによって妊娠し、子供を生むという奇跡をも行うことができるのだ。」というように現実の出来事の問題とし

て理解しているのではないのでしょうか。けれどもこの言葉は実は、それとは少し違う意味を持っているのです。この37節の原文を直訳すると「なぜなら、神においては、全ての言葉は不可能ではないからだ」となります。お気付きのように、原文には「言葉」という用語があるのです。つまり、神の言葉は全て実現する、実現できない言葉はない、ということを行っているのです。では、神様がマリアに語り、約束した御言葉とは何だったのでしょうか。それは単に彼女が神様の力によって身ごもって男の子を生む、というだけのことではありません。彼女が生むその子がイエスと名付けられ、神の子、救い主となり、ダビデの王座を受け継ぎ、神様の救いにあずかる民をとこしえに治める者となる、という恵みあふれる内容が語られていたのです。また天使は、マリアが神様から特別な恵みをいただいていると告げました。あなたは恵まれた方であり、主があなたと共におられると語ったのです。そして、マリアが受け止めたのもこのことだったのです。ですから、マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」と応答したのです。神の御子が人間の肉体をとり、すべての点で私たちと同じものになってくださろうとしています。そのへりくだりに応えて、マリアは神の御前に自らを低くし、自分を神の御業の器として差し出しました。そのことがまさに、使徒信条で告白している「主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生れ、」という文言であるのです。そして、私たちもまた、礼拝において使徒信条を告白する度に、マリアのように自らを神の御業の器として差し出すことへと招かれているのです。そして、「お言葉どおり、この身に成りますように。」とお応えしていくときに、私たちにもまた、新しい命に満ちた応答の生活が開かれていくのです。